

第3回 新しい日田の森林・林業・木材産業振興ビジョン策定委員会

日時：平成26年12月8日（月）14：00～16：00

場所：日田市役所4階 庁議室

1. 開会

2. 委員長挨拶

3. 議事

(1) 第2回策定委員会以降の動きについて

(2) 新しい日田の森林・林業・木材産業振興ビジョン（案）説明
（骨子（案）からの変更点）

(3) 協議事項

新しい日田の森林・林業・木材産業振興ビジョン（案）について

協議

城戸委員長

質問・意見を承りたい。

委員

9ページの(1)②の「国有林はわずか4%」という表現を「国有林は4%」と変更いただきたい。19ページの最後の行に「タケノコ生産用に活用できる竹林に整備する必要もある」と課題として記載されているが、後半の施策に対応箇所がない。また、40ページの特用林産物の振興ではタケノコでなく、しいたけの記載がある。逆に、しいたけについては、現状と課題に記載がないので、どちらにも記載漏れがないようにしていただきたい。

城戸委員長

内容については整合性をとっていただきたい。

委員

19ページに、「広葉樹二次林や竹林が少なくなり」と記載があるが、竹林は増加しており、少なくなっていない。竹林の利用が少なくなっているとの記載なら分かるが……。また、現在では、広葉樹二次林は姿形がなくなっているのではないか。木炭を活用していた時代

はあったが、現在は針葉樹にとって変わっている。竹林の数的把握は難しいのでなされていない。誤解を生む表現なので気になった。

事務局

指摘の箇所については、竹林については「整備・管理されている竹林」が少なくなったと読んでいただきたい。

委員

「整備・管理されている」と上についているので、そのように読めるかもしれないが、高度に利用されているタケノコ林であるとか、そういったものを指して「少なくなっている」という表現になっているのであれば、分からないこともないが、今非常に多くなっている竹林に対して、「少なくなり」という表現を使うのが気になった。

事務局

当該箇所については、県の森ビジョンを参考に記載している。県の森ビジョンでは「広葉樹二次林や竹林が整備・管理されなくなり」との表現になっているので、そこを踏まえた表現に変更したい。

城戸委員長

しいたけとタケノコの現状と課題については、19 ページへの記載ではなく、林業の現状と課題の箇所で、特用林産物を別途記載すべきだ。

委員

21 ページの中段の記載は、立木が河川に流出した理由が「人工林の手入れ不足」と読める。しかし、手入れ不足ではなく、人工林の挿し木スギはそもそも支持根などが発達しない。この表現では、間伐など手入れをすれば根が発達するかのように受け取れる。スギを本来植えてはいけない箇所に植えたことが問題である。その問題をどうするかという表現にする必要がある。

事務局

それについては、様々な見解があり難しいところではあるが、今のご意見への対応としては「河川や溪流沿いの森林については、潜在自然植生を考慮した上で、枝張りが良く根系が発達する広葉樹に誘導していく必要があります。」と記載をしている。

委員

この問題は、今回のビジョンだけの問題ではなく、今後の森林管理全体の問題としての

提起である。

城戸委員長

対策としては、事務局からあったように広葉樹に誘導していくとの記載で問題ないのではないか。今の指摘は「見解」としてどうかということになる。

委員

後段について、集中豪雨災害を契機とした流木対策として、日田市が積極的な姿勢を見せたことについては、評価をしている。表現はどうしても、流木対策には積極的に取り組んで欲しい。

委員

策定の目的の箇所について、本市の林業の沿革をもう少し詳しく記載してもらいたい。材の目が粗い日田が、なぜ三大美林と言われているかといえば、製材技術が優れているからだ。日本一の市場のはい積制度や曲がり材を挽く技術がある。ブランド化の話しがでてくるので、それを「くどく」記載して欲しい。なくなりつつある技術のためにも記載してもらいたい。29 ページのクラスターの図で森林管理と素材生産を同じ括りにしている。しかし、酸性雨など自然環境が劣悪になるなかで、災害利用、危機管理のためにも今から先、それらは別と考えた方が良く。また、森林資源のカスケード利用については、すでに木質バイオマスを電源利用しているところもある。さらに効率的なカスケード利用を考えるのであれば、電源利用の廃熱など熱源活用が必要だが、それは林業だけでは不十分なので、企業誘致による利活用を検討する必要がある。危機管理の観点からは、林道・作業道の記述が弱いと感じる。消防団活動などへの利用などももう少し厚く記載した方がよいのではないか。44 ページのイノベーションの図については、この体制を整えばイノベーションが進むという保証はない。きっかけがないと「ピン」と来ない。例えば、この策定委員会を契機に「イノベーション委員会」などを組織し、視察にいくなどしなければ、「イノベーション」の具体像がイメージできないと思う。儲かる林業をめざすのであれば「イノベーション」が必要になる。実現のための道筋を検討していただきたい。

城戸委員長

策定の目的については、日田で林業・木材産業が発達した経緯はしつこく記載した方がよい。今回のビジョンを国など外部に見てもらうにあたっては、日田の特質を明確にすることが重要だ。昔は関連産業が発達しており、今でいうクラスター化が図られていたが、今はかつて程クラスターが強くない。だからこそ「再クラスター化」を図るために、ビジョンを策定するというシナリオになっている。策定の目的の前に、策定の背景を挿入することも検討してもらいたい。カスケード利用でのエネルギー利用は、林業だけでなく農業

などにも利用できる。だからこそ、新しいクラスターの形成＝再クラスター化になる。絵を挿入する必要はないかもしれないが、29 ページの図で木質バイオマス利用の先には農業、介護施設の温浴施設での利用など、木質バイオマスから地域全体にいかを広げるかというようなイメージを出した方が良いのではないか。53 ページの林業咸宜園、アカデミー、デザイン会議の記述は詳細でわかりやすい一方、44 ページのイノベーションは内容が弱い。また、担い手育成の重点施策（3）－3の内容と関連する部分大きい。そこを上手く整理した方が良いのではないか。また、44 ページの図で突如「筑後川流域自治体」が記載されている。流域自治体との連携は必要であるが、その前の記載は「福岡市中心部」への PR とあり、福岡市と流域自治体との使い分けが必要ではないか。

委員

クラスターの図については、かつては同じ概念だったかもしれないが、森林づくりと素材生産は分けた方が良い。流域の人たちに向けて公益的機能を発揮できる森林づくりを発信していく必要がある。

城戸委員長

今、結論を出すのは難しいので、後ほど事務局で検討して欲しい。それと、各委員の意見を聞いて、年代別、過去、現在、未来のクラスターの図が必要だと思った。昔とはクラスターが違はずなので、ページ見開きでの記載があるとわかりやすいのではないか。かつては筏での運搬がトラックに変わったなど。市民や外部への PR になると思う。

委員

先ほどの意見にあった「三大美林」については諸説あるので誤解を生む。「三大林業地」に入れるというのは分かるが。

委員

最終的に重要となるのは販売である。日田材は建築用材が主流であるにも関わらず、住宅需要の減少など、出口が広がらないことが課題だ。ビジョンでは「販売先の開拓」としか記載がないが、具体的にどのように開拓するかが大事ではないか。住宅が全くなくなるわけではなく、一定量は維持される。大手企業は営業部隊がいて、営業努力によって何とか販売しているような状況である。他の建材との競合に勝てるような販売戦略に力を入れるべき。

城戸委員長

今の意見はその通りだが、販売の分野になるとビジョンにどこまで記載するかというのが難しいと思う。事務局としてはどのように考えるか。

事務局

ご指摘の通り、日田材の需要拡大は重要課題である。市役所内のいわゆる事業仕分けの会議で、日田材プレゼント事業を6年間程展開し一定の効果はあったが、今後は市内だけでなく域外への展開も必要ではないかという指摘もあった。域外への展開は、行政だけでは難しい部分もあるので、民間の木協や木材関連団体の皆様に取り組みを進めていただき、行政はそれらをサポートするという体制がもっと必要と考えている。しかし、ビジョンの中にはそこまで詳細に書けていないというのが実情だ。

城戸委員長

一つのアイデアとして、行政が展示会など大きなマーケットに売り込みに行くという方法はある。

委員

それも大切だが、その先、どのように売り込んで行くのかという、営業教育・営業戦略が必要だと思う。

城戸委員長

その辺りの内容は、事務局としては54ページの木材アカデミーの箇所に含めたのではないかと。ただし、木材アカデミーがデザイン会議に引っ張られ過ぎている感じがする。人材育成においては、営業戦略なども考えなければいけない。一人何役もこなせる人材が不可欠だ。営業に耐えうる人材の育成も木材アカデミーに必要ではないか。また、展示会への出展が必要だと思えば、木協だけでなく様々な人が一緒に出かけることも必要だろう。

委員

販売戦略については、かつて材木が売れた時代のままで、木材価格の低迷時代に対応した体制を作り上げることができていないのではないかと。林業は日田市の基幹産業なので、市として戦略をつくっていく必要があるのではないかと。

委員

林業咸宜園は実践的に考えた方がよい。販売戦略は、大手にはかなわないが、日田は木造軸組工法で技術的に優位性があった。前回の新構想と異なるのは、職人が大幅に減少した点だろう。以前のクラスターと今回のクラスターを比べると、日田に大工技術が蓄積された背景としては、林業の歴史があり、大工の技術が蓄積され、木工技術が盛んだった理由があるはずだ。その技術の流出対策として、ビジョンの中でもうひとつクラスターを作っても良い程だ。福岡近辺で、国産材住宅を建てることができる職人がいない。日田も宮大工などを抱えた優秀な工務店から倒産していった。林業咸宜園には、減少する職人対策

も含まれる。販売戦略も大切だが、出口を担う職人の育成はさらに重要である。

城戸委員長

職人をつくるのか、職人の減少を前提に新しい作り方を提案するのか、両方必要だと思うが、難しい選択だ。

委員

日田材の全国的な位置づけを把握する必要がある。銘木の良いところを真似したような材は売れない。現在、私たちの扱っている 80%は曲がり材ということを見ると、発電や集成材、合板向けにいかに高く販売し、下支えするかという視点の方が重要である。ログハウスの組合を持っているが、難しいながらも売れている。ビジョンの中で日田材の位置づけをしっかりと認識させるべきだ。販売といっても、北九州、博多に行って直材のサンプルを作ったところで、日田材で占める割合は非常に小さい。銘木市で出されるような材は日田ではわずかしかないことを認識すべき。発電、集成材、合板という新しい分野が出てきたため、日田材は恵まれた時代に入ったと思う。日田材の材質、位置づけの認識を皆に知らせる必要がある。

委員

今の話しからすると、日田材の価値は高くないということだが、ビジョンでは付加価値が高いというイメージになっている。

城戸委員長

色々と問題があっても、最大公約数として日田材の力がどの程度かという共通認識は必要だろう。日田においては、日田材の欠点を職人がカバーしてきたのではないかな。

委員

樹種を統一するような動きがなかったので、いま市場などでは様々な色の丸太が出荷されている。強度が違うので色が違っている。現在の建築法の基準では、樹種によっては使えないスギがある。

委員

伐った自分の山の木がどう流通しているのか分からないのが問題。どのような長さでどこに使われているのかわからない。利用する側のニーズに応じて、皆さんと丸太の長さなどの商品開発を行いたいと思っている。37 ページに適正な素材（丸太）供給量の確保とあるが、皆が自分の山の木がどこに行っているかわからない状態だ。文中の「合板用や木質バイオマス発電用の素材（丸太）需要の増加が想定されることから」その対策として「市

内での素材生産量の拡大を目指す」というのは整合性がとれない。「需要が増加するので、とにかく伐れ」というのは、用途がそれぞれ違うのに、そこを加味せず増産するということだ。良くあることだが、素材生産量を拡大しなければいけない理由と、拡大方法がマッチングしていない。

城戸委員長

地域一体となった販売戦略の見直し、流通ルートの見直しという記載が必要ではないか。最終的には個別の調整が必要だが、一度、地域全体での見直しも必要だろう。

委員

販売戦略などと併せて、50年後は同質の材が出荷できるように、県のビジョンに準じる形でも構わないので、ある程度の品種の統一なども必要になるのではないか。

委員

50年先の用途を見据えた樹種や育成方法というのは難しいため、今ある樹種、材質の木を時代に合わせていかに使えるようにするかということが大切だ。皆伐せざるを得ない状況もあり、皆伐後の林地をどうするかは非常に重要だが、皆伐を進めるためにはまず、目の前にある材をいかに利用していくかを考える必要がある。曲がり材であっても、利用側の本当のニーズに応じて木取りをすれば、直材に近い材として売れる可能性もある。

委員

日田材とは、市内の製材所で挽いたものや、日田の原木市場に集荷された材を指す。日田林業の一番の特徴はボリュームだと思う。今ある材を活かすとなるとボリュームを活かすしかない。

城戸委員長

ボリュームは一つの強みだが、それがいつまで続くかは分からない。ボリュームをいかに維持していくかを考える必要はあるだろう。

委員

間伐がなされていない林分などの高齢木が問題になりつつある。世帯の高齢化により、手入れへの熱意が冷めている所有者も多い。そのような中、高齢級林分の対策は必要となるだろう。

委員

先ほどの意見の通り、商的な流れの記載がもう少し欲しいと思っていた。また、日田材

の材質的な特徴への指摘もあった。日田市内での素材生産量が 20 万 m³、原木市場が域外から入荷する分が 30 万 m³がある。日田は集散地という特徴をもっと認識してもらいたい。販売先が区分けされている。直材であれば、日田の製材所で乾燥材として利用され、B 材であれば、エンジニアリングウッドとして出ていけば良い。後は、発電所、梱包材などの用途がある。日田では原木市場の機能として、それらをきちんと仕分けしてきた。よそから集めて来る材として直材を増やすという選択肢もあるだろうし、BC 材を使って製材で品質を落としてしまうようなことなく、ブランド化する方法もあるだろうと思う。

城戸委員長

販売、営業に着目すると、林業、林産業に観光なども含めて、福岡あたりで何かイベントを開催するという方法もあるのか。それとも、そのようなものは必要ないのか。

委員

宮崎県が福岡市内で何回かそのようなものを開催した際は、良く売れるが後が続かない。安売り攻勢をかけるということになってしまう。地域間競争ばかりをやっていては、結局は地域が疲弊して国産材の需要拡大にはつながらない。日田でそのようなことをしたくない。それよりは、一緒になって国産材を売っていくことを支持したい。

委員

どのような商品でも認知度を挙げていく必要がある。商工会議所では年明けに福岡市の中央公園でメイドイン日田大物産展を開催する予定である。木材については、青柳インテリアからのみの出展となっている。声をかけてもなかなか集まらない。一般市民向けの飲食店も出すが、福岡などのバイヤーを対象として案内を出し、販路を拡大することが目的である。丸太、製材などの出展も歓迎する。チャンスがあれば出ていくことが必要。

城戸委員長

単独ではなく、まとまってPRすることが重要である。日田全体の認知度、ブランド力を上げることが日田材の需要拡大につながる。ビジョンに関する市役所内での庁内の連絡会議も開催されたので、横断的な取り組みが可能になるのではないかと。

委員

出口対策ができないと全体にしわ寄せが来る。販路の中に、中国などの海外をどのように考えるのか。

委員

まずは国内の出口対策が重要ではないのか。

委員

しかし、国内需要は頭打ちになっている。

委員

海外への販路拡大においても、バイヤーの存在が重要になるので、まずは福岡都市圏などでパイプを作ることが必要だろう。今の時点で積極的な展開というのは難しいのではないか。

委員

日田辺りにも、海外出荷の話しが来るが、八代港や志布志港などへの運賃・船積み賃を考えると採算が合わない。円安の進行なども考えると、国内での合板や集成材向け出荷の方が現実的だ。

城戸委員長

これからさらに円安基調が続く。そのため、国内向け出荷を重視する方向で良いのではないか。行政のビジョンとして、将来的な経済状況を見極めるといのは難しいかもしれないが、皆伐後に何を植えるのかというのは重要になるだろう。ビジョンの中では、きちんと分けるのは難しいかもしれないが、短期、中期、長期、超長期という時間軸での整理が必要だ。短期的には、林業と観光をいかにうまくタイアップさせるかが重要になる。着地型観光という点においては、豆田やサッポロビール、焼酎工場など地域資源も豊富である。それらと、マイ下駄の作成や森林浴などと組み合わせたコースをつくることも考えられる。観光と併せることでブランド力を上げることができる。重点施策の中にその点も折り込んで欲しい。また、日田林工の活用はもう少し強く記載して欲しい。県立高校なので、市役所としてできないとは思いますが、岩手県の黒沢尻工業高校は専攻科を設置しており、通常の課程を修了した後、2年間学ぶことができる。インターンシップなどもあり、県内への就職率が100%となっている。同じように、日田林工に専攻科をつくり、製材や林業の現場でインターンシップを実施するなど、実践的な経験を積む場として活用する方法もある。Uターン人材などの育成の場としても活用できる。せっかくシンボリックな林工があり、前例もあるので、そこに専攻科をつくるような調査・研究を市独自で行うなどもあるのではないか。

委員

観光と森林を結びつけることができないかという話しをしたとき、森林セラピーの話が出てきた。山を歩けるように整備すると同時に、専門の医師がプログラムをつくるというものであった。山に人を案内するには、安全の面などから専門人材の養成が必要になる。森林体験学習や環境教育ができる人を育成する必要がある。45ページと51ページをみると、

森林環境教育の項目があるが、中身は材木を中心とした木育プログラムの開発となっている。しかし、森の公益的機能や多面的機能を子供に教えるということが大切で、木育プログラムという表現は適切でないので、森林環境教育と変えて欲しい。

事務局

ご指摘いただいた部分については、今の意見の主旨を網羅した形でビジョンの中で分けて記載していると考えている。例えば、46 ページに筑後流域圏という考え方になるが。水を育む森林を保全する活動をしていくという表現であったり、47 ページに産業観光、48 ページでは市民が集える森林空間の整備として、森林浴の記載をしている。

城戸委員長

環境教育と産業観光は別ものなので、分けて記載することが大切。原案のままで良いのではないか。都会の人は、製材所の様子や伐採の様子に観光として感動すると思う。危険箇所もあるので、できることから始めれば良い。長崎さるくでは、観光としてきちんとお金をとっているのだから、日田での着地型観光も事業として行うべきだ。林業関係でなく、他の観光関係者とも連携する必要がある。

委員

今の話からすると、一番の観光資源になりそうなのは、高性能林業機械での伐採現場ではないか。これまでは、林業や木材産業の現場に人をつれてきて、森林や林業木材産業を理解してもらうことが主旨だったが、そうではなく、地域にお金を落とす仕組みとして産業観光を実施するということか。

城戸委員長

その通りだ。北九州の工場夜景ツアーやスマートコミュニティーのツアーなどは高額にも関わらず、全国から人が集まっている。日田林工、県の試験場なども十分に産業観光として成り立つのではないか。日田の人が思っているよりも、魅力ある資源が揃っている。

委員

策定の目的を書き込むことに関しては大賛成である。植林がいつ始まったのかなどの記載はあってしかるべき。品物を売ることに関しては、家具は消費者が一番近い。これまで、自社で、イタリア、ドイツ、フランスで板のサンプルを展示した実績がある。ドイツでは好評いただいた。売れ筋の商品などのデータを提示することは可能だ。加工材については、日本が一番輸入が多い。そのため、輸入した材を検証し、どのような形状、大きさであれば世界に通用するかということ身近で学ぶ機会がある。それを応用して、世界へ展開することも可能ではないか。世界中から仕入れた材料を全国で見て回って、含水率や輸入方法

を研究したものを逆手にとって、海外に持って行けば開発資金もかからない。家具における日田材の使用量はまだ少ないので、これから拡大していきたい。家具は地域主力の構造材ではなく板材を使用する。世界に対しては、板材の方が需要が大きい。板材に関する研究、製品化について、ビジョンの中にも折り込んでもらえればと思う。

委員

今の住宅は、木材を見せない作り方が主流になっている。銘木にこだわらず強度を出してもらえればよい。「日田住宅」のメインはあぜづくり、板倉造りになると思うが、実際に日田で産直住宅ができるかは疑問に思うようになった。しかし、宮崎県の諸塚村の産直住宅の話を知ると希望が持てる。それを参考に作っていきたい。これまで、市では6年間日田材プレゼント事業を実施してきたが、市内に日田材の住宅が建つ以上の効果はなかったのではないかと感じる。建築業者とも連携して、企画コンペでの優秀作品に支給するなど、事業実施にあたっては、もう少し工夫の余地があったのではないかと感じる。そのような企画を建築士会として挙げていきたい。

委員

林地残材を活用した木質バイオマス発電所を作ったのは、日田が素材生産量があるからだ。これが、地域に良い結果をもたらして欲しいと思っている。稼働から1年、年間7万トン搬入されたが、未利用材の活用によって地域の底上げにつながると思うが、弊害もあるかもしれない。短期、中期、長期の視点を明確にしつつ、日田らしいビジョンとなるようにして欲しい。地域への他産業への貢献を常に考えており、発電所の見学者数は延べ1800人を超えた。遠方から見学者にはできるだけ日田で食事・宿泊してもらおうよう依頼している。県外見学者からは1000円いただいている。短期的には、効果的な産業観光を作り上げて欲しい。

委員

丸太生産から住宅生産まで日田の中でできれば、付加価値が高まると思う。素材生産、製材、設計士などが連携のフォームができれば、日田の林業・木材産業に役立つと思う。熊本、福岡、鳥栖、久留米などへ産直住宅の展開ができれば、全体的な底上げになるのではないかと感じる。

委員

県の次世代の森づくりビジョンでは、人工林から環境林への転換について具体的な数字を出したことで、拡大造林一辺倒の施策から大きく舵を切ったとして、インパクトを与えたと考えている。今回のビジョンの中で具体的な数字を出すかわからないが、何かインパクトのある内容になればと思っている。皆伐後の森づくりについては、これまでの

3000本/ha 植栽だけでなく、構造材、集成材、バイオマス利用など需要に応じた森づくりが必要となる。その需要に応じた選択肢を示すことで、具体性を持たせることも必要ではないかと思う。

委員

観光振興に関する意見をいただいたが、伐採現場や製材所、バイオマス発電所など地域資源を余すことなく活用することで、日田市全体の観光の底上げにもつながる。上手く利用することが大切だ。日田の製材所は70数社あり、柱から板など地域で全てが揃うということが、他の地域にない強みだと考える。日田市全体が大型製材工場になっている。これをまとめて、機能強化することが重要だ。今後、伐採量が増えてくるので、日田の製材機能を高めて大型工場に打ち勝つような体制づくりをする必要があるだろう。

城戸委員長

このビジョン案については、部会での議論を踏まえて事務局でまとめたものであり、今回の委員会での意見をまとめて、再度事務局で加筆・修正を行うことになる。1月はパブリックコメントを出すことになっている。

事務局

今回の意見を踏まえて、今月中に案を固めたい。市民の意見聴取としてパブリックコメントを出すのが1月8日からを予定している。その前に委員各位に修正後のビジョン案を送付予定。パブリックコメント終了後に部会を再度開き、最後委員会を開催して最終確定としたい。

城戸委員長

事務局において加筆・修正を行い、パブリックコメントと部会を経て、委員会での最終確定という流れになる。

委員各位

異議なし

事務局

これをもちまして、本日の委員会を終了いたします。ありがとうございました。

以上